

目次

解説・凡例	六	八、上人の子持ちたる事	三
一、沙石集第一并序	九	九、上人の女、父之看病したる事	四
二、太神宮の御事	二〇	一〇、学生之蟻蟻之問答の事	四
三、神明慈悲と智慧と有る人を貴び給ふ事	二五	一一、学生之歌好みたる事	五
四、和光之方便に依りて妄念を止むる事	二六	一二、神明の歌を感じて人を助け給へる事	五
五、薬師観音の利益に依りて命を全うする事	三三	一三、歌之故に命を失へる事	五
六、菩薩之利生代りて苦を受くる事	三〇	一四、正直之人、宝を得たる事	五
七、律学者之学と行と相違せる事	三五	一五、芳心有る人の事	六
二一、継女を蛇に合はせむと欲したる事	三三	一六、母之為に忠孝有る人の事	六
二二、蛇を害して頓死したる事	三三	一七、盲目之母を養へる事	六
二三、僻事する者の即ち酬ひたる事	三三	一八、君に忠有りて栄えたる事	七
二四、前業の酬ひたる事	三六	一九、師の礼有る事	七
二五、前生之親を殺す事	三〇	二〇、齒取らるる事	八
二六、慳貪の者の事	三三		
二七、経を焼き目失ひたる事	三六		
二八、天狗之人に真言教へたる事	三七		
二九、貧窮を追ひ出したる事	三三		
三〇、耳売りたる人の事	二七		
三一、俗士之遁世門の事	三三		
三二、強盗法師之道心有る事	三六		

二三、悪縁に値ひて発心したる事	三三
三四、述懐の事	三七
三五、	三三
三六、	三六
三七、	三七
三八、	三七
三九、	三三
四〇、	二七
四一、	三三
四二、	三六
四三、	三七
四四、	三三
四五、	三六
四六、	三七
四七、	三三
四八、	三六
四九、	三七
五〇、	三三
五一、	三六
五二、	三七
五三、	三三
五四、	三六
五五、	三七
五六、	三三
五七、	三六
五八、	三七
五九、	三三
六〇、	三六
六一、	三七
六二、	三三
六三、	三六
六四、	三七
六五、	三三
六六、	三六
六七、	三七
六八、	三三
六九、	三六
七〇、	三七
七一、	三三
七二、	三六
七三、	三七
七四、	三三
七五、	三六
七六、	三七
七七、	三三
七八、	三六
七九、	三七
八〇、	三三
八一、	三六
八二、	三七
八三、	三三
八四、	三六
八五、	三七
八六、	三三
八七、	三六
八八、	三七
八九、	三三
九〇、	三六
九一、	三七
九二、	三三
九三、	三六
九四、	三七
九五、	三三
九六、	三六
九七、	三七
九八、	三三
九九、	三六
一〇〇、	三七

の箇所は梵舜本・米沢本・北野本・内閣文庫本・慶長古活字十行本などとの校合によって、改訂・削除・補入を行った。その際、「」の補入で断わりがないものは、すべて日本古典文学大系本に拠る。

一、原文は漢字片仮名交り文であるが、読み易さの便を考慮して、片仮名を平仮名に、漢字は通行字体に改めた。

一、原本の漢字・漢語には、一切ルビを付していないが、必要に応じてルビを付けた。

一、仮名遣いは底本のとおりとした。ただし、歴史的仮名遣いと相違する場合は、歴史的仮名遣いを右傍に（）で示した。

一、送り仮名については、現行の送り仮名に従い、底本において送り足りないものについては、これを（）に示して補い、送り過ぎているものについては底本どおりとした。

一、句読点および会話文の「」の付け方については、原則として日本古典文学大系『沙石集』に倣った。

一、語の清濁は、中世的な発音に従うことを原則とした。清濁の不明な語については古辞書や仏教語辞書などの読み方に従った。

一、注は簡略を旨とした。注を付けるにあたって、次の諸書を使用した。

- 色葉字類抄、日葡辞書、古本節用集、下学集、和漢三才図会、新編国歌大観、古今著聞集、十訓抄、宇治拾遺物語、尊卑分脈、古事類苑、織田仏教大事典、仏教語大辞典(中村 元)、日本国語大辞典、広辞苑、学研漢和大辞典、角川新字源、古語大辞典(小学館)、岩波古語辞典、例解古語辞典(三省堂)、五体字類
- なお、日本古典文学大系『沙石集』に負うところが多かった。記して感謝申し上げる。

1 新しく話題を起こす時に用いる語。
2 あらあらしく品のないことばと柔和なことば。

3 仏教における根本の真理。
4 くらしを立て、世を渡るための仕事。

5 副詞。そのまま全部。すべて。
6 すべてのもののありのままのすがた。真理。

7 道理に合わない、表面だけを飾った、誠実味のないことば。仏教で十悪の一。

8 民衆に成仏の道を説く教え。一乗ともいう。

9 世俗の、あさはかで取るにたらないこと。仏教の説く真理で、俗世間の事柄を離れた深妙なことわり。

10 大阪地方の海域の古称。歌詞の「難波の葦」に基づいて、「よしあし」と続けた表現。

11 一歩一歩。一歩ずつ。
12 この世が苦しいものであることを海にたとえた語。

13 興に乗じて語ることば。
14 「アタリテハ」の促音便形「アタツテハ」の「ツ」を表記しない形。

一、沙石集第一并序(序)

夫¹儂²言³軟語⁴みな第一義⁵に帰し、治⁶生⁷産⁸業⁹しかしながら¹⁰實¹¹相¹²にそむかず。然¹³(れ)ば¹⁴狂¹⁵言¹⁶綺¹⁷語¹⁸のあだなる¹⁹戯²⁰(れ)を縁²¹として、²²仏²³乘²⁴の妙²⁵なる道²⁶に入れ、世²⁷間²⁸淺²⁹近³⁰の賤³¹(し)き事³²を譬³³(へ)として、³⁴勝³⁵義³⁶の深³⁷き理³⁸を知(ら)しめんと思³⁹(ふ)。是⁴⁰(の)故⁴¹に、老⁴²の眠⁴³(り)をさまし、徒⁴⁴(ら)なる手⁴⁵すさまに、見⁴⁶し事⁴⁷聞⁴⁸(き)し事、思⁴⁹(ひ)出⁵⁰(づ)るに随⁵¹(ひ)て、⁵²難⁵³波⁵⁴江⁵⁵のよしあしをもらはず、藻⁵⁶塩⁵⁷草⁵⁸手にまかせて、かきあつめ侍⁵⁹り。かゝる老⁶⁰法⁶¹師⁶²は、無⁶³常⁶⁴の念⁶⁵々⁶⁶におかす事⁶⁷を覚⁶⁸り、冥⁶⁹土⁷⁰ノ歩⁷¹々にちかづく事⁷²を驚⁷³(き)て、黄⁷⁴泉⁷⁵の遠⁷⁶き路⁷⁷の糧⁷⁸をつゝみ、苦⁷⁹海⁸⁰の深⁸¹き流⁸²(れ)の船⁸³をよそふべきに、徒⁸⁴(ら)なる興⁸⁵言⁸⁶をあつめ、虚⁸⁷(し)き世⁸⁸事⁸⁹を注⁹⁰す。時⁹¹にあ⁹²たては光⁹³陰⁹⁴をおしませ。後⁹⁵にをひては賢⁹⁶哲⁹⁷をはぢず。由⁹⁸なきに似⁹⁹れども、愚¹⁰⁰(か)なる人の仏¹⁰¹法¹⁰²の大¹⁰³きなる益¹⁰⁴をもさとらず、和¹⁰⁵光¹⁰⁶之¹⁰⁷深¹⁰⁸き心¹⁰⁹をもしらず、賢¹¹⁰愚¹¹¹のしな¹¹²ことなるをもわきまへず、因¹¹³果¹¹⁴の理¹¹⁵さだまれをも信¹¹⁶ぜぬために、或¹¹⁷(い)は經¹¹⁸論¹¹⁹の明¹²⁰(らか)なる文¹²¹を引¹²²(き)、或